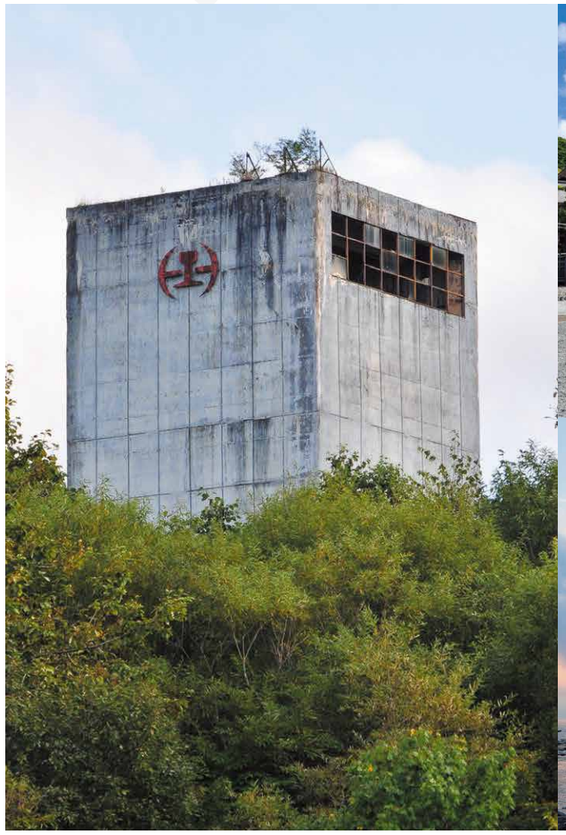
Nishi-EZO × History Journey

西蝦夷 歴史旅

石器時代から人々が定住していたとされる西蝦夷。アイヌの人々の暮らし、和人の移入とニシン漁の栄華、明治期の開拓、炭鉱の隆盛、そして現代に至るまでの、海と山に囲まれた西蝦夷の人々の営みの歴史は、数々の遺跡や名所、旧跡でその記憶に触れることができる。



各時代の記憶が残る西蝦夷の歴史遺産

続縄文時代の集落跡とされる天塩町の川口遺跡などに見られるように、先史時代から始まった西蝦夷の人々の暮らし。それはやがてアイヌの人々の文化へと移っていった。

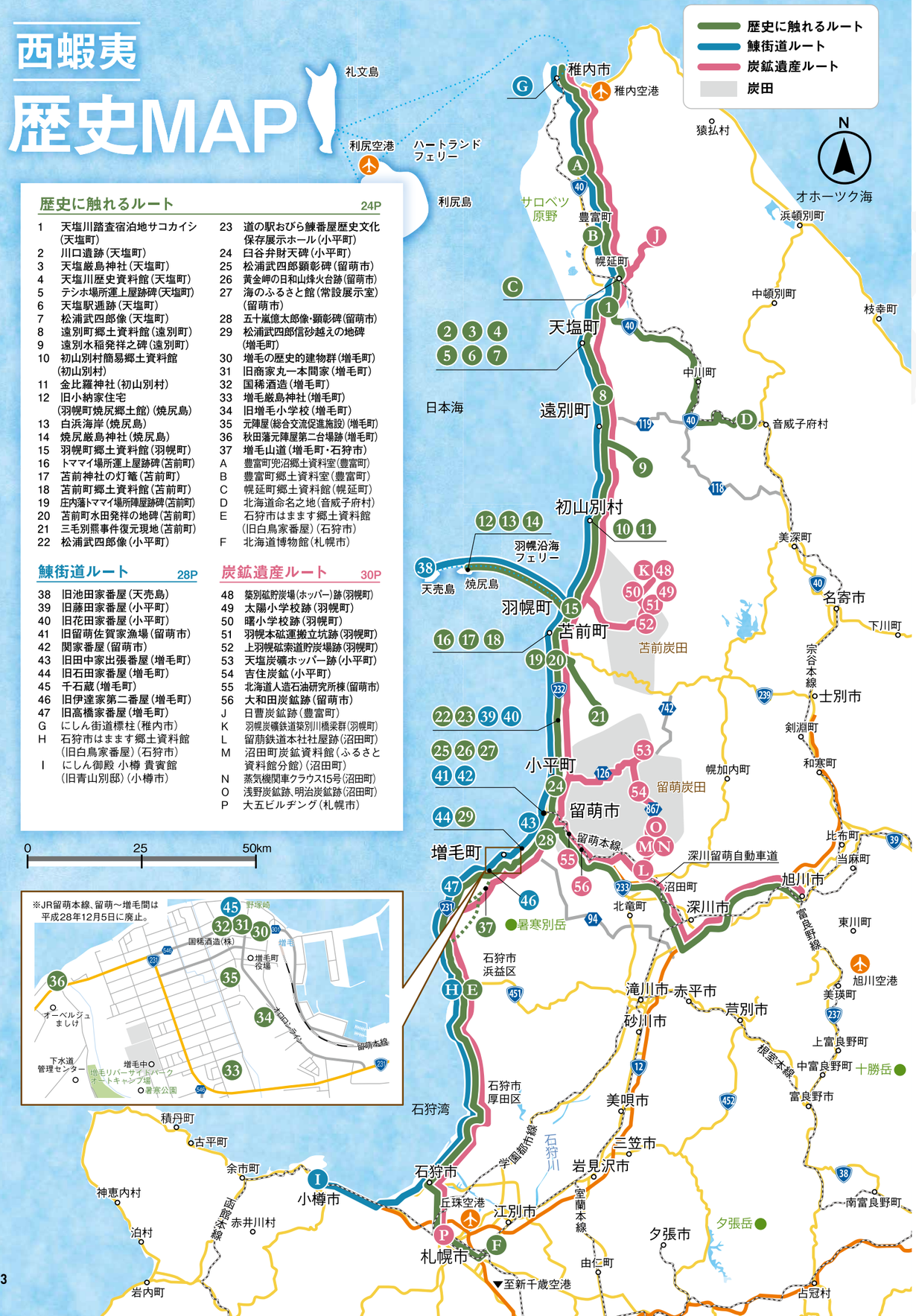
和人が本格的に移り住んできたのは江戸時代中期から。松前藩の知行地として漁業や交易を行う和人が定住し始め、寛延3(1750)年には村山傳兵衛が場所請負人として増毛や留萌で場所を経営。千石場所としてニシン漁に一攫千金を夢見たヤン衆たちの活気を呼ぶことになる。

江戸時代後期、幕府の命で各藩が北方警備の任に就くなど各地で開拓の鍬が入れられた。19世紀半ばに幾度となく蝦夷地の踏査に訪れた探検家・松浦武四郎は、「西蝦夷日誌」に当時の現地の様子を克明に報告している。

明治時代には農業移民の入植と開拓が本格化。また昭和に入ると留萌炭田の開発が進み、羽幌町や小平町などに大規模炭鉱が多数開坑。人口も急増し、鉄道や港の建設などインフラも整備され、現代へ繋がる礎が築かれていった。

これら歴史の記憶は、その多くが今も各地に様々な形で残っている。

西蝦夷 歴史MAP



歴史に触れるルート 24P

1 天塩川踏査宿泊地サコカイシ(天塩町)
2 川口遺跡(天塩町)
3 天塩厳島神社(天塩町)
4 天塩川歴史資料館(天塩町)
5 テシホ場所運上屋跡碑(天塩町)
6 天塩駅逓跡(天塩町)
7 松浦武四郎像(天塩町)
8 遠別町郷土資料館(遠別町)
9 遠別水稲発祥之碑(遠別町)
10 初山別村簡易郷土資料館(初山別村)
11 金比羅神社(初山別村)
12 旧小納家住宅(羽幌町焼尻郷土館)(焼尻島)
13 白浜海岸(焼尻島)
14 焼尻厳島神社(焼尻島)
15 羽幌町郷土資料館(羽幌町)
16 トママイ場所運上屋跡碑(苫前町)
17 苫前神社の灯篭(苫前町)
18 苫前町郷土資料館(苫前町)
19 庄内藩トママイ場所陣屋跡碑(苫前町)
20 苫前町水田発祥の地碑(苫前町)
21 三毛別羆事件復元現地(苫前町)
22 松浦武四郎像(小平町)
23 道の駅おびら鰊番屋歴史文化保存展示ホール(小平町)
24 臼谷弁財天碑(小平町)
25 松浦武四郎顕彰碑(留萌市)
26 黄金岬の日和山烽火台跡(留萌市)
27 海のふるさと館(常設展示室)(留萌市)
28 五十嵐億太郎像・顕彰碑(留萌市)
29 松浦武四郎信砂越えの地碑(増毛町)
30 増毛の歴史的建物群(増毛町)
31 旧商家丸一本間家(増毛町)
32 国稀酒造(増毛町)
33 増毛厳島神社(増毛町)
34 旧増毛小学校(増毛町)
35 元陣屋(総合交流促進施設)(増毛町)
36 秋田藩元陣屋第二台場跡(増毛町)
37 増毛山道(増毛町・石狩市)
A 豊富町兜沼郷土資料室(豊富町)
B 豊富町郷土資料室(豊富町)
C 幌延町郷土資料館(幌延町)
D 北海道命名之地(音威子府村)
E 石狩市はまます郷土資料館(旧白鳥家番屋)(石狩市)
F 北海道博物館(札幌市)

鰊街道ルート 28P

38 旧池田家番屋(天売島)
39 旧藤田家番屋(小平町)
40 旧花田家番屋(小平町)
41 旧留萌佐賀家漁場(留萌市)
42 関家番屋(留萌市)
43 旧田中家出張番屋(増毛町)
44 旧石田家番屋(増毛町)
45 千石蔵(増毛町)
46 旧伊達家第二番屋(増毛町)
47 旧高橋家番屋(増毛町)
G にしん街道標柱(稚内市)
H 石狩市はまます郷土資料館(旧白鳥家番屋)(石狩市)
I にしん御殿 小樽 貴賓館(旧青山別邸)(小樽市)

炭鉱遺産ルート 30P

48 築別砿貯炭場(ホッパー)跡(羽幌町)
49 太陽小学校跡(羽幌町)
50 曙小学校跡(羽幌町)
51 羽幌本砿運搬立坑跡(羽幌町)
52 上羽幌砿索道貯炭場跡(羽幌町)
53 天塩炭礦ホッパー跡(小平町)
54 吉住炭鉱(小平町)
55 北海道人造石油研究所棟(留萌市)
56 大和田炭鉱跡(留萌市)
J 日曹炭鉱跡(豊富町)
K 羽幌炭礦鉄道築別川橋梁群(羽幌町)
L 留萌鉄道本社社屋跡(沼田町)
M 沼田町炭鉱資料館(ふるさと資料館分館)(沼田町)
N 蒸気機関車クラウス15号(沼田町)
O 浅野炭鉱跡、明治炭鉱跡(沼田町)
P 大五ビルヂング(札幌市)

Nishi-EZO × History Journey
歴史に触れるルート

西蝦夷の遥かなる歴史を辿る

1700年頃に始まった「場所請負制度」により和人が定住し始めてから、およそ300年。以来、西蝦夷、そして留萌管内一帯は数々の歴史の記憶を刻んできた。先史時代の遺跡も含め、各地に残る先人たちの記憶を辿ってみよう。

2 川口遺跡
天塩町川口基線

続縄文、オホーツク、擦文と3時代にまたがる竪穴住居などの遺跡。天塩川河口付近の風景林には遊歩道が整備され、復元された住居などを見ることができる。

問い合せ先／01632-2-1026（天塩町教育委員会）

3 天塩厳島神社
天塩町川口基線1226・1

場所請負人としてテシホやトママイ、ルルモッペなどを請け負っていた松前の豪商、6代目栖原角兵衛が、文化元（1804）年9月に弁財天を祀ったのが始まりとされている。現在地へは明治42（1909）年に移転。平成23年に町の有形文化財に指定。

問い合せ先／01632-2-1036

5 テシホ場所運上屋跡碑
天塩町海岸通4丁目3975・2

海産物などの交易を行った場所である運上屋の跡地。寛政（1789～1800年）の頃に開設されたとされる。主にテシホ場所の事務所や漁舎として使用された。

問い合せ先／01632-2-2071（天塩川歴史資料館）

6 天塩駅逓跡
天塩町海岸通2丁目23・1

明治5（1872）年に設置されたとされる駅逓所があった場所。駅逓とは、明治～昭和初期に道内辺境地での交通補助機関として、宿泊所や人員及び馬の取次ぎ、郵便業務などを行った制度のこと。

問い合せ先／01632-2-2071（天塩川歴史資料館）

9 遠別水稲発祥之碑
遠別町共栄

「最北の稲作地」に建つ、明治34（1901）年にこの地で水稲栽培に成功した南山仁太郎氏の功績を称えて建立された記念碑。遠別町の稲作の起源となった。

問い合せ先／01632-7-2203（遠別町教育委員会）

11 金比羅神社
初山別村みさき台公園階段下

海岸に流れ着いた金比羅さんの御札を漁師が海に返したが、何度も戻ってきたことからお宮を建立。それ以来海難事故がなくなったという言い伝えがある。海中鳥居が美しい。

問い合せ先／0164・67・2211（初山別村役場）

12 旧小納家住宅（羽幌町焼尻郷土館）
羽幌町焼尻東浜183

漁業と共に呉服、雑貨商、郵便事業を手がけていた石川県出身の小納（こな）家の旧邸宅。道指定有形文化財。内部には、当時の繁栄ぶりがうかがえる豪華な造りが見られる。

問い合せ先／01648-2-3392　開館期間／5～9月
開館時間／9:00～16:00　休館日／期間中はなし
入館料／大人320円、高校生以下無料

13 白浜海岸
羽幌町焼尻白浜

日本が鎖国中だった嘉永元（1848）年、後に日本初の英語教師となったアメリカ人ラナルド・マクドナルドが日本に初めて上陸した地。かつて記念碑的なトーテムポールが現地に立っていた。

問い合せ先／0164・62・6666（羽幌町観光協会）

14 焼尻厳島神社
羽幌町焼尻緑岡4

天保15（1844）年、漁場を開設した栖原家の番人だった山田多三郎が鳥居を寄進し創建された神社。浜辺の弁天崎に建てられ、その後現在地に移転。厳島神社は天売島にもあり、神輿は留萌管内最大といわれる。

問い合せ先／0164・62・6666（羽幌町観光協会）

16 トママイ場所運上屋跡碑
苫前町苫前

増毛、留萌、天塩とともに4箇所設置された運上屋のひとつ。場所請負人の栖原家が文化元（1804）年に開設し、松浦武四郎も宿泊し、「西蝦夷日誌」にその記載がある。

問い合せ先／0164・65・4076（苫前町公民館）

17 苫前神社の灯篭
苫前町苫前 苫前神社境内

天明6（1786）年に天売・焼尻、翌年に苫前と留萌の場所請負人となった栖原角兵衛の栖原店から、文政6（1823）年に奉納された灯篭。すぐ横にある狛犬も、文久4（1864）年に栖原店から奉納されたもの。

問い合せ先／0164-65-4076（苫前町公民館）

19 庄内藩トママイ場所陣屋跡碑
苫前町香川

安政6（1859）年、蝦夷地警護を命じられた庄内藩が陣屋を構えた跡地。後に「アッシ判官」と呼ばれた開拓判官、戸田荘十郎（松本十郎）も父と共に在勤していた。

問い合せ先／0164・65・4076（苫前町公民館）

20 苫前町水田発祥の地碑
苫前町香川

岩手県出身の開拓者、藤田万助翁が幾多の困難の末に明治17（1884）年にこの地で稲作に成功させた功績を称えて建てられた記念碑。

問い合せ先／0164・65・4076（苫前町公民館）

21 三毛別羆事件復元現地
苫前町三渓

大正4（1915）年12月、開拓移民10人が体重380kgもの巨大なヒグマに襲われ殺傷された、日本獣害史上最悪の惨事の現場。当時の様子が再現されている。

問い合せ先／0164-64-2212
（苫前町企画振興課商工観光係）
開館期間／5月中旬～10月下旬
観覧無料

24 臼谷弁財天碑
小平町臼谷

松浦武四郎の紀行文に記載があるウシャ（臼谷）の「弁天社」の本尊とみられている石碑。道内では珍しい江戸時代中期の石碑で、建立者を記す銘には「施主 村山傳兵衛」と読める。

問い合せ先／0164・56・9500（小平町教育委員会）

26 黄金岬の日和山烽火台跡
留萌市大町2丁目3・1

かつて留萌川河口は北前船の寄港地であり、夜間の目印である烽火台が黄金岬の高台に設置されていた。「海のふるさと館」横の広場に跡が残り、記念碑が建てられている。

問い合せ先／0164-42-0435
（留萌市教育委員会生涯学習課）

28 五十嵐億太郎像・顕彰碑
留萌市礼受町 千望台

留萌地方で随一の資産家だった五十嵐綱治の養子となった五十嵐億太郎。父の意思を継いで明治～昭和期に留萌の港湾建設や鉄道敷設などに尽力し「留萌発展の父」と言われた。

問い合せ先／0164・42・0435（留萌市教育委員会生涯学習課）

30 増毛の歴史的建物群
旧JR増毛駅周辺

旧増毛駅周辺には、明治から昭和初期にかけて造られた木造3階建ての「富田屋旅館」ほかの歴史的な建造物が多く残り、映画のロケ地としても使用された。北海道遺産にも選定されている。

問い合せ先／0164・53・3332（増毛町観光協会）

31 旧商家丸一本間家
増毛町弁天町1丁目27

明治時代、「天塩國随一の豪商」と呼ばれた佐渡出身の本間泰蔵が、約20年の歳月をかけ建築した町屋様式の豪華な建物。内部は一般公開されている。国指定重要文化財。

問い合せ先／0164-53-1511　開館期間／4月下旬～11月上旬
開館時間／10:00～17:00
休館日／木曜（祝日の場合開館、前日休み。7・8月は無休）
入館料／大人400円、高校生300円、小中学生200円

32 国稀酒造
増毛町稲葉町1丁目17

ニシン漁や呉服など多角経営をした本間家が明治15（1882）年に創業した、日本最北の酒蔵。工場と酒蔵の一部は完成当時のまま現在まで受け継がれている。

問い合せ先／0164-53-1050
営業時間／9:00～17:00（酒蔵見学は～16:30）
休業日／年末年始　入場無料

33 増毛厳島神社
増毛町稲葉町3丁目38

宝暦3（1753）年、場所請負人の村山傳兵衛が運上屋の守護として弁天社を建てたのが始まりとされる。技術の粋を集めた彫刻や拝殿の天井画、北前船が活躍していた時代の奉納絵馬など、芸術的な価値も高い。

問い合せ先／0164-53-2306
拝観料／大人300円

34 旧増毛小学校
増毛町見晴町120

昭和11（1936）年に建てられた、道内最古の木造校舎。木造トラス工法で作られた体育館は見事のひと言。当時のニシン漁の網元たちの寄進によって建てられた。

問い合せ先／0164-53-3332
（増毛町観光協会）

36 秋田藩元陣屋第二台場跡
増毛町別苅1・1

幕府の命で増毛に陣屋を置き北方警護にあたった秋田藩が、暑寒別川河口の高台に設置した砲台跡。和製大砲のレプリカが置かれている。第一台場は旧増毛駅裏手の高台にあった。

問い合せ先／0164・53・2427（増毛町教育委員会文化振興係）

西蝦夷と松浦武四郎

アイヌの人々を思い続けた「北海道」の名付け親

北海道がまだ「蝦夷地」と呼ばれていた時代、概ね松前から釧路、根室あたりまでの太平洋沿岸が「東蝦夷」、上ノ国や江差あたりから北の日本海～オホーツク海沿岸の地域が「西蝦夷」と呼ばれており、松浦武四郎が安政３（１８５６）～５（１８５８）年にまとめた「東西蝦夷山川地理取調日誌」より、西蝦夷一帯を踏査した際の記録を編纂したものが「西蝦夷日誌」である。現在は六編まで確認されており、現在の増毛～苫前にあたる留萌管内の様子は第六編に記載されている。

松浦武四郎は文化15（１８１８）年２月、伊勢国（現在の三重県）に生まれた、幕末期に活躍した探検家。28歳から52歳までの間に、一般人として、また幕府の御用掛としてその旺盛な好奇心を発揮し蝦夷地をくまなく踏査。北方警備の目的で各地の詳細な記録をまとめ、幕府に報告していた。明治維新後は開拓使に雇われ開拓判官となり、その際に国名や郡名の選定に携わり、「北海道」を名付けたとされている。

武四郎は、各地を巡る中で目の当たりにしたアイヌの人々への不当な扱いに対して幾度となく報告文の中に記し、彼らのことを後々まで気にかけていた。「北海道」の名も、天塩川調査の際にアイヌの古老から聞いた話を元に「北加伊道」と発案したといわれている。武四郎は、希代の探検家であったと同時に和人とアイヌとのコネクターでもあったのだ。

２０１８年は、武四郎が「北海道」と名付けてから１５０年にあたる。各地に多数残る武四郎ゆかりの地に足を運び、彼の偉業を感じてみてはいかがだろう。

22

7

上/道の駅おびら鰊番屋の正面、「にしん文化歴史公園」に立つ松浦武四郎像。
下/天塩町鏡沼公園内にある松浦武四郎像と歌碑。

武四郎ゆかりの場所

D 北海道命名之地
音威子府村物満内 天塩川河川敷
当地でアイヌの長老から「この地に生まれた者をカイと呼ぶ」という話を聞いたことから「北加伊道」の名を発想したとされている。

1 天塩川踏査宿泊地 サコカイシ
天塩町作返 作返川河口付近
天塩川踏査時の一日目の宿泊地として「天塩日誌」などに記載されている地で、案内板は総合スポーツ公園内に設置。このほかにも、留萌地方や宗谷地方、上川地方北部には宿泊地、または宿泊推定地とされる場所が多く存在する。

25 松浦武四郎顕彰碑
留萌市大町 望洋公園
安政３（１８５６）年に武四郎がルルモッペを訪れた際、この碑の立っている場所から見た運上屋の様子を描いた、「西蝦夷日誌」第六編に記されている絵図が碑に刻まれている。

29 松浦武四郎信砂越えの地碑
増毛町彦部 彦部橋付近
安政３年の踏査の際、石狩国イタイベツ（現在の雨竜町北部付近）から「信砂越え山道」でマシケにたどり着いたという記録がある。現在の道道94号「増毛稲田線」が、その山道とほぼ同じルートであると推測されている。

37 21世紀に蘇った増毛山道

江戸末期に開削され、松浦武四郎が「蝦夷地第一の出来映え」と絶賛した増毛山道。１５０年以上経った現代に蘇った山道は、歴史的に興味深いものだった。

開通と衰退、そして21世紀に復活

増毛山道とは、現在の増毛町別苅から石狩市浜益区幌（ほろ）の９里22丁（約37㎞）を結ぶ、江戸時代に開削された陸路。兵員輸送路を確保するため、江戸幕府の指示により場所請負人の伊達林右衛門が雄冬の断崖を迂回する山道を開削した。かかった費用は１３１０両。現代に換算すると１億７０３０万円に相当する。

途中には駅逓も置かれたが、時代の変化と共にやがて利用者も減り、廃れていった。昭和20年頃まで使われていたというが、国道が開通してからは忘れられた存在となった。

近年になり、「ＮＰＯ法人増毛山道の会」が発足し地道な調査や測量を実施。平成21年から2年かけて山道の位置が特定された。現在では約27㎞区間が復元され全線開通、保存活動が続けられている。一般開放はされていないが、定期的に体験トレッキングが開催され、今後もコースを増やしていく予定だという。

ところどころに当時の木製電柱がそのまま残っている。

明治40年に埋石された一等水準点。重さ１４０kgほどの三河産花崗岩をここまで運んできたことに驚く。

NPO法人 増毛山道の会
事務局長 小杉忠利さん。

お問い合わせ
NPO法人
増毛山道の会
http://www.kosugi-sp.jp/sando/top.html

西蝦夷 資料館・資料展示 index

留萌管内のまちには郷土資料館や郷土の文化・資料を展示する施設がある。
近隣も含め、それぞれ特色ある建物や展示の豊富さなど特徴があるので、是非とも訪れてほしい。

苫前町 苫前町郷土資料館 18

国道232号から「古代ロマンロード」に入って直進した先にある、旧苫前町役場庁舎を利用した資料館。幻の巨熊と言われた「北海太郎」の剥製が迫力満点のポーズで来館者を出迎えてくれる。

所在地／苫前町苫前393-1421　TEL.0164-64-2954
開館期間／5～10月　開館時間／10:00～17:00
休館日／月曜（祝日の場合開館、翌日休み。夏休み期間中は無休）
入館料／（町内在住）大人100円、小中学生50円（町外在住）大人300円、小中学生100円

天塩町 天塩川歴史資料館 4

旧役場庁舎として使用されていた建物は、重厚な赤レンガ造りの外観が目を引く。天塩川を探検した松浦武四郎に関する資料や、町内で発掘された、世界的に希少な「テシオコククジラ」の化石が展示されている。

所在地／天塩町新栄通６丁目　TEL.01632-2-2071
開館期間／５～10月　開館時間／10:00～17:00（最終入館 16:00）
休館日／月曜　入館料／大人 200 円、高校生以下無料

小平町 道の駅おびら鰊番屋 歴史文化保存展示ホール 23

道の駅おびら鰊番屋のリニューアルに伴い、それまで敷地内にあった資料館を閉館。道の駅の2階に展示ホールとして平成27（2015）年に開館した。「三船殉難事件」で沈んだ船から引き上げた遺留品なども展示。

所在地／小平町鬼鹿広富　TEL.0164-56-1828
開館時間／9:00～18:00（12～翌年３月は 10:00～17:00）
休館日／年末年始　入館無料

遠別町 遠別町郷土資料館 8

昭和57（1982）年に閉校した旧丸松小学校の校舎を改修した資料館で、昭和12（1937）年築の木造平屋校舎そのものが貴重。開拓の歴史を伝える展示や旧国鉄羽幌線の開通からの歴史を紹介する資料が豊富。

所在地／遠別町丸松 163　問い合せ先／ 01632-7-2353（遠別町教育委員会）
開館期間／５～10月　開館時間／10:00～17:00
入館無料　※職員が常駐していないので、見学希望は希望日の３日前までに要申し込み

留萌市 海のふるさと館（常設展示室） 27

黄金岬を見下ろす高台に建つ施設の1階にある、留萌市の歴史資料展示室。留萌と日本海の関係や、化石、海洋生物、アイヌ文化、縄文文化遺跡、北前船やニシン漁関係など資料が充実している。

所在地／留萌市大町２丁目　TEL.0164-43-6677
開館期間／４月下旬～10月中旬　開館時間／ 9:00～18:00
休館日／開館期間中はなし　入館無料

初山別村 初山別村簡易郷土資料館 10

旧豊岬中学校の校舎内に設置されたスペースに、昭和50年代から集められてきた鉄道や漁業、林業などに関する資料が展示されている。お盆期間を除き常時開館ではないので、見学希望は問い合せを。

所在地／初山別村豊岬 182　TEL.0164-67-2136（初山別村教育委員会）
開館期間／お盆期間のみ（期間外の見学希望は要問い合せ）
開館時間／10:00～17:00　入館無料

増毛町 元陣屋（総合交流促進施設） 35

増毛で北方警備の任についた秋田藩の陣屋跡に建ち、資料展示室では鎧兜の試着もできる。館内には陣屋の建物が再現され、増毛の侍文化を今に伝える豊富な資料が美しく展示されている。

所在地／増毛町永寿町４丁目 49　TEL.0164-53-3522
開館時間／ 9:00～17:00　休館日／木曜（祝日の場合開館、前日休み）
入館料／大人 400 円、高校生 300 円、小中学生 200 円

羽幌町 羽幌町郷土資料館 15

旧裁判所を改築し、平成元（1989）年開館。町内で発掘された約1700点に及ぶ化石の展示や、ニシン漁の時代のほか、特に羽幌の発展に大きく貢献した羽幌炭鉱に関する資料が豊富に揃っている。

所在地／羽幌町南町 20-1　TEL.0164-62-4519
開館期間／５～10月　開館時間／10:00～16:00　休館日／月曜
（祝日の場合開館、翌日休み）　入館料／大人 210 円、高校生以下無料

近隣の資料館

A 豊富町兜沼郷土資料室
所在地／豊富町上サロベツ3863
TEL.0162-82-1355（豊富町教育委員会社会教育係）　開館期間／5～10月
開館時間／9:00～16:00　休館日／月～金曜（開館日以外の見学希望は要問い合せ）　入館無料

B 豊富町郷土資料室
所在地／豊富町西3条4丁目（旧豊富町学校給食センター）　TEL.0162-82-1355（豊富町教育委員会社会教育係）　開館期間／5月上旬～10月下旬　開館時間／10:00～16:00　休館日／月～金曜（開館日以外の見学希望は要問い合せ）入館無料

C 幌延町郷土資料館
所在地／幌延町幌延102-1（農村改善センター内）
TEL.01632-5-2977
開館時間／8:30～17:00　休館日／土・日曜、祝日、年末年始（1月1日は開館）
入館無料

E H 石狩市はまます郷土資料館（旧白鳥家番屋）
所在地／石狩市浜益区浜益77-1
TEL.0133-79-2402
開館期間／5～10月　開館時間／10:00～16:00
休館日／火曜（祝日の場合開館、翌日休み）
入館料／大人300円、中学生以下無料

Nishi-EZO × History Journey

鰊街道ルート

群来（くき）に沸いたヤン衆（ロマン）たちの夢の跡

道南・江差から、寿都や小樽、厚田など日本海沿いを北上し、宗谷地方まで続くニシン街道。沿岸の各市町村には「にしん街道」の標柱が立てられているほか、一攫千金を夢見たヤン衆たちの活気を偲ばせる、ニシン番屋などの遺産が国道231号沿いに点在している。

40 旧花田家番屋

上／重要文化財指定とともに町が買収し、3年の歳月と約1億9千万円の費用を投じて解体修復。道の駅おびら鰊番屋が併設され、小平町やニシン漁文化の歴史を伝えている。 左上／延べ床面積906㎡の番屋の内部。使用されている木材はほとんどが近隣の山林から調達されたものであることがわかっている。 左下／漁盛期には200人ものヤン衆が寝泊りしたという大規模番屋。各所に設えられた贅を尽くした意匠が、当時の繁栄ぶりを示している。

所在地／小平町鬼鹿広富35-2
TEL.0164-57-1411
営業時間／5～10月 9:30～17:00
11～4月 10:00～16:00
定休日／月曜（6月第3月曜～8月第2月曜は無休）、12月28日～1月15日
入館料／大人400円、小中学生150円

ニシン漁家の隆盛を感じる最北端の国指定重要文化財

「群来」とは、ニシンが浅瀬の海草に産卵するために海岸に押し寄せ、大量のオスの精液で海面が乳白色に染められる現象を言う。昭和30年頃までは、毎年2～3月の春を感じる季節になると北海道日本海沿岸のあちこちで見られ、ニシンが「春告魚」と呼ばれる所以ともなった。江戸時代から北海道のニシンは広く知られるようになり、明治に入るとその漁獲量は一気に増大。道内や本州各地から、一攫千金を夢見て多くの商人や網元がやってきて漁場を開き、数百人単位で働き手「ヤン衆」を雇って荒稼ぎし、財を成した。

その網元たちが、自身やヤン衆たちの住居及び漁業拠点として建てたのが番屋である。道内に残る番屋の中でも、小平町の旧花田家番屋は最大級の規模であり、ニシン番屋として唯一国の重要文化財に指定されている。

明治38（1905）年ごろの完成とされ、親方が暮らす空間とヤン衆たちの空間とに分けられた間取り、ヤン衆たちが食事をする大広間を取り囲むように配置された「寝台」など、典型的な番屋の構造が顕著に見られ、当時の漁家の繁栄ぶりが伺える豪華な造りとなっている。

ちなみに「ニシン御殿」と呼ばれるものは網元が私宅として建てた豪邸を指し、番屋とは異なる。

38 旧池田家番屋
羽幌町天売富磯

明治34（1901）～35（1902）年頃に建てられた、天売島に現存する番屋跡。以前はユースホステルとして利用されていた。外観のみ見学可能。

39 旧藤田家番屋
小平町鬼鹿広富90

旧花田家番屋から北へ約1㎞。明治末期の建築で、現在もタコの燻製で知られる藤田水産が店舗として使用している。
TEL.0164-57-1048
営業時間／8時半～18時
定休日／元日

42 関家番屋
留萌市礼受町24

沿岸バス「礼受1区」バス停から100mほど南の国道沿いに建つ番屋は、明治10年代の建築。現在も住宅として使われ続けている。外観のみ見学可能。マナーを守って見学を。

43 旧田中家出張番屋
増毛町阿分

留萌市街地から増毛方面へ約6㎞の場所にある出張番屋跡。以前この近くにあった旧田中家番屋は、平成6（1994）年にスペインへ移築された。外観のみ見学可能。

41 旧留萌佐賀家漁場

所在地／留萌市礼受町
TEL.0164-42-0435
（留萌市教育委員会生涯学習課）
通常は外観のみ見学可能

右／国道231号沿いの留萌礼受海岸に建つ母屋（番屋）。左手にはニシン粕の干し場やトタ倉、奥には船倉や稲荷社などがある。
中／母屋から国道を挟んだ海岸には、はっきりとわかる釜場の跡が。
左／漁労具一式3,745点は国の重要民俗文化財、建物と敷地は史跡に指定。夏場には内部公開も実施している。

一大産業・ニシン漁の現場を今に伝える史跡

江戸時代から昭和初期にかけてのニシン漁が繁栄を極めたのは、それが単にニシンを漁獲し出荷するだけの事業ではなかったということを表している。

当時、ニシンは食用としてよりも主に綿花や絹糸をとるための蚕のえさの桑の栽培など農作物生産のための肥料に使用するニシン粕としての需要が大半を占めていた。大勢の労働力を雇い、大量のニシンを水揚げ後、すぐに巨大な釜で煮出してニシン粕を製造。そして北前船などで全国へ運ばれていった。ニシン漁は、当時の北海道経済を支える一大産業であったのだ。

そのような北海道日本海沿岸地域におけるニシン漁業の一連の形態が理解できる場所として貴重なのが、留萌市礼受の海岸に残る旧留萌佐賀家漁場である。母屋（番屋）、トタ倉（製品保管庫）、船倉、網倉、ローカ（ニシンの一時保管庫）、稲荷社が現存し、また前浜にはニシン粕製造の釜場や船着場の跡も見られ、往時の漁場景観が良好な形で保存されている。トタ倉や母屋に保存されていた3500点を超える漁労具や文書も大変貴重なものであり、国指定史跡、また経済産業省の「近代化産業遺産」にも認定されている。

45 千石蔵

上／堂々とした造りの外観。旧商家丸一本間家からやや海側に建っている。
左／館内に展示されている船は、増毛で考案された「ダルマハギ」という構造を持つ貴重なもの。彩色まで鮮やかに残っている。

旧商家丸一本間家が営んだニシン漁の遺構

能登国から松前に入り商人となった村山傳兵衛が、留萌や増毛に場所請負人として漁場を開設したのが寛延3（1750）年。以来、留萌や増毛はニシンの好漁場「千石場所」として大いに賑わった。特に増毛は道内有数の漁場として多くの人が集まり、西蝦夷の商業の中心地として栄えた。

現在も続く旧商家丸一本間家（P25参照）も、そんな時代に増毛で財を成した商家のひとつである。現在も「国稀酒造」として続く酒造業や、呉服、雑貨商など多角経営していた本間家はニシン漁も営んでおり、その時代に使用していた倉庫が、この千石蔵だ。

かつては増毛港にあり、漁具の保管に使われていたが大正時代の港拡幅に伴い現在地に移転。正確な築年度は不明だが、推定でも100年以上は経っているという。現在は夏季のみ無料開放され、内部にはニシン船や実際に使われていた漁具などを展示。コーヒー等の販売のほか、広い空間を生かしてイベントホールなどとしても利用されている。

所在地／増毛町稲葉海岸町53
TEL.0164-53-1050（国稀酒造）
営業時間／10時～17時
入館無料　冬季閉館

44 旧石田家番屋
増毛町阿分

国道231号を留萌市街地方向から道道94号へ左折しすぐにある、2階建ての赤い屋根が特徴の番屋。明治中期の築で、母屋が現在も住宅として使われている。外観のみ見学可能。マナーを守って見学を。

46 旧伊達家第二番屋
増毛町別苅

別苅漁港から徒歩約15分、沿岸バス「別苅」バス停からすぐの場所に現存する番屋跡。昭和6（1931）年に建てられ、現在は留萌市の井原水産が所有。外観のみ見学可能。

47 旧高橋家番屋
増毛町雄冬43-1

増毛町雄冬市街地の石狩市浜益との境にあり、現在は改装されて雄冬生活改善センター及び増毛消防団第五分団の建物として使用されている。外観のみ見学可能。

旧高橋家番屋を改装した雄冬生活改善センターの外観。下階が消防団の車庫になっているのが面白い。

Nishi-EZO × History Journey
炭鉱遺産ルート

山間に眠る隆盛の欠片（かけら）を尋ねる

留萌市、小平町、羽幌町、空知の沼田町にまたがる留萌炭田。羽幌炭鉱を筆頭に大和田炭鉱、天塩炭礦、豊平炭鉱など大規模な炭鉱が高品質な石炭を産出し、隆盛を誇っていた。今は山間にひっそりと佇むその遺構を訪ねる。

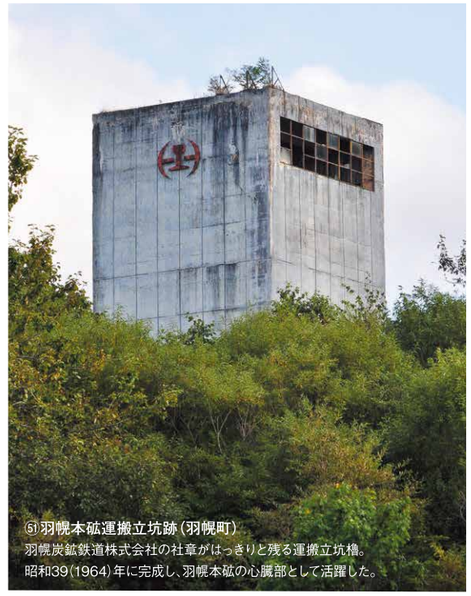
《羽幌炭鉱跡》

48 築別砿貯炭場（ホッパー）跡　羽幌町築別炭鉱
51 羽幌本砿運搬立坑跡　羽幌町羽幌炭鉱
52 上羽幌砿索道貯炭場跡　羽幌町羽幌炭鉱

㊽築別砿貯炭場（ホッパー）跡（羽幌町）

㊷上羽幌砿索道貯炭場跡（羽幌町）

上／2000tもの容量を持つ精炭ポケット（選炭された石炭を貯めておく槽）を備えた、当時の最先端技術の粋を集めたホッパーであった。
下／上羽幌砿は採掘後の石炭を索道で羽幌本砿へ運搬していた。写真は石炭を貯めていた索道貯炭場。


㊶羽幌本砿運搬立坑跡（羽幌町）
羽幌炭鉱鉄道株式会社の社章がはっきりと残る運搬立坑櫓。
昭和39（1964）年に完成し、羽幌本砿の心臓部として活躍した。

わずか30年で消えた北の大炭鉱・羽幌炭鉱

明治・大正期に他財閥と肩を並べ、神戸製鋼やサッポロビール、日本製粉など現在名だたる企業の源流ともなった「幻の総合商社」と言われる鈴木商店。その大番頭で、あの渋沢栄一をして「事業家としては天才だ」と言わしめた故・金子直吉の最後の夢の跡が、羽幌の山奥に眠っている。

鈴木商店は昭和恐慌により倒産。新会社の太陽曹達で「鈴木再興」を夢見た金子が昭和14（1939）年に開発を開始した羽幌炭鉱は、翌年に築別本砿を開坑。同時に炭鉱鉄道の建設に着手し、羽幌炭礦鉄道株式会社を設立。その翌年には羽幌炭礦鉄道が開通した。昭和22（1947）年に二砿（上羽幌）、昭和24（1949）年には羽幌本砿が開坑し、3鉱区体制で良質な石炭を産出し続け、昭和43（1968）年には年産114万tを記録。本社も札幌の大通西5丁目に建てた「大五ビル」に置くなど隆盛を極めたが、時代の流れには逆らえず昭和45（1970）年、その歴史に幕を下ろした。

昭和30年代には3地区で1万人以上の人口を数えた人々の暮らしを閉じ込めた夢の跡（あと）は、今も静かに当時の様子を伝えてくれる。

問い合せ先／0164・62・6666（羽幌町観光協会）0164・62・4519（羽幌町郷土資料館）

49 太陽小学校跡　羽幌町築別炭鉱11

鈴木商店の後継会社・太陽曹達（後・太陽産業、現・太陽鉱工）の名に由来。現存の校舎は昭和41（1966）年に完成したもの。

50 曙小学校跡　羽幌町曙

もとは昭和37（1962）年完成の太陽高校の校舎であったが、昭和46（1971）年の閉校後に曙小学校が移転。平成2（1990）年に閉校した。

㊾太陽小学校跡（羽幌町）

㊿曙小学校跡（羽幌町）

上／円形の体育館が特徴的。プールもあり、当時留萌管内では1、2を争う規模であった。
下／玄関口には今も高校と小学校の2つの校章が掲げられている。

羽幌炭鉱跡を巡るツアー

株式会社沿岸ハイヤーでは、羽幌炭鉱跡を巡るガイド付きのツアーを実施している。ドライバー兼ガイドが羽幌町の歴史や炭鉱にまつわるエピソードを交えて案内してくれる。1名からでも対応可能で、事前に電話での完全予約制。

期間／4月下旬～11月下旬の毎日
所要時間／約2時間　人数／1台につき3名まで
連絡先／沿岸ハイヤー　TEL.0164-62-1551
HP／http://www.engan-bus.co.jp/

《天塩炭礦跡》

53 天塩炭礦ホッパー跡　小平町達布

北炭が開発した「てんてつバス」のルーツ

北海道炭礦汽船株式会社（北炭）が昭和13（1938）年に、人造石油製造の原料とするために開発を開始した炭鉱が天塩炭礦達布坑。開発と同時に留萌～達布間に天塩炭礦鉄道が敷かれ、その後北炭から事業を引き継いだ天塩炭礦鉄道株式会社が運営した。昭和42（1967）年に閉山。

現在は達布地区の道道126号沿いに、ホッパー（貯炭場）跡のコンクリート構造物が残るのみである。なお、鉄道事業は閉山後にバス転換して天塩鉄道バスに引き継がれ、それが現在の「てんてつバス」となっている。

山奥の道道沿いに突如現れる、巨大なコンクリートの遺構。その大きさと迫力は羽幌炭鉱のホッパー跡にも引けを取らない。

54 吉住炭鉱

管内唯一の現役炭鉱

小平町達布から北空知の沼田町へ抜ける道道867号の道沿いに、現在も稼動中の管内唯一の露頭掘り炭鉱、吉住炭鉱がある。露頭掘りとは、以前の主流であった地中を掘り進んでいく「坑内掘り」に対し、地表から炭層を掘り進めていく採炭方式。道内の火力発電所に、空知地方を中心に道内で数か所の露頭掘り炭鉱が石炭を供給しており、吉住炭鉱もそのうちの一つだ。一般の立ち入りや見学は不可だが、留萌炭田の歴史を受け継ぐ貴重な存在と言えよう。

所在地／小平町達布

《その他》

55 北海道人造石油研究所棟　留萌市緑ヶ丘町1丁目6

石炭から石油を精製した戦時の国策会社跡

北海道人造石油株式会社、通称「人石」は昭和12（1937）年、戦時の石油需要に伴い、北海道の豊富な石炭から人造石油を合成する目的で、北炭が中心となって設立された国策会社だ。

滝川、留萌、釧路に工場を設置することが決まり、留萌では天塩炭礦など近隣の炭鉱からの良質な石炭と、昭和8（1933）年に完成した留萌港からの製品の積み出しを期待して、昭和14（1939）年に起工、翌年に留萌研究所として開所。当時一流の化学者や研究者が集められ、ピーク時には300名近い所員が在籍した。しかし戦況の悪化により本格的な工場の建設は叶わず、基礎的な研究や滝川工場で生産された粗油からより高品質な製品の開発が行われたが、終戦によりわずか6年で会社は解散した。

現在、人石留萌研究所の建物は自衛隊留萌駐屯地の本部棟として利用されている。駐屯地見学を申し込めば、敷地内の見学と併せて本部棟の内覧も可能だ。

㊺北海道人造石油研究所棟（留萌市）
終戦直後には留萌水産工業株式会社の施設として利用されたこともある。
TEL.0164-42-2655（自衛隊留萌駐屯地）
通常は敷地外より外観のみ見学可能。駐屯地見学希望は自衛隊留萌駐屯地へ要問い合せ。

56 大和田炭鉱跡　留萌市大和田

明治33（1900）年に開坑した「メンコ炭山」。明治38（1905）年に実業家の大和田壮七が経営に乗り出し大和田炭鉱となった。明治43（1910）年に開通した留萌鉄道の駅名が大和田となり、それが地名にもなった。昭和34（1959）年閉山。

大和田神社の裏手側に、密閉された坑口などが残る。